

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

## 正定業念佛の宗教哲學的意義

平岡隆信

淨土教に於ける阿彌陀佛の本願に正定した所の淨土生  
生の行業口称念仏が此正定業の念佛であつて、此純  
粹行としての南無阿彌陀佛である。

而してその根本要諦は阿彌陀佛に歸結する事であつて  
南無とは絶体的なものであると共に阿彌陀佛は時局的  
空門的に起えた絶對的なものである。然れは此処に於  
て善導法然の教説を簡單に考察しなから論題の考察を  
進めゆくならば、善導大師に於ては願行具足の念佛義  
の確立を規定されてをり、如來の本願力に誓約された  
十念の称佛が行はれる場合、必ず順彼佛願故の行はれ  
る事を充分に指示されて宗教的自覺より隨順佛教隨順  
解意の態度に終始して善導の心は念佛を信行する心な  
りと玄義分等一指示されてをり、觀聖疏（散善義）に  
一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に時節の久近  
を問はず念々に念てざるをば、此を正定の業と名づ

く、彼の佛願に順ずるが故に」とされて居るのである。  
而して法然又この文「ふかく魂にぞめ、心にとどめ」  
られて念佛が万行の總和であり平等の慈悲に答する法  
門なる事を宣明されてゐる。

斯くて法然の教説は念佛信行の現証即ち慈喜に希望を  
もつて口土社会を淨め行く宗教体系であつて、称名念佛  
の信行に絶体的価値を味いつつその心理態に淨行口土  
の念願の現行される確信をもつべき事が又こされてゐる  
事をうかがひ知るのである。

善導は念佛者の行に正雜の二種ありとして、「正行」と  
は専ら三聖を讀誦し、意識言語或は行為の全幅を弥陀  
と淨土とに集注する事を云うのであつて、この正行を  
更に「正定の業」と「助業」とに二分し前座の「一心に専ら  
弥陀の名号（中略）念々に捨てざる（下略）」もの間斷なき  
称名念佛が正定の行であつて、讀誦觀經禮拜等は總て  
助業であるは今更述べる筈もない事であるが、此の「正  
定」と助の二業以外の諸善はみな優心と名利の念とを離  
れ得る難行であつて、正行の者が彼の佛の願に順ずる  
が故に「百人が百人まで必ず往生するに對し雜業の者  
は百千の中、ま小に一人二人が往生するに過ぎないの  
であつて、吾々は弥陀が粗惡の口土を捨て善妙の口土を  
選取したのに応じて一切の難行を捨てて正定の業たる  
称名念佛を選取するのである。

而して正定業とは此選取本願の念伴であり選取本願  
念伴業にほ

「計りみ小ほ大速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には且聖道を圖きて選びて浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中には且諸の難行を抛りて選びて正行に帰すべし、正行を修せんと欲せば（中略）選んで正定を專にすべし、正定の業とは即ち是小佛名を稱するなり、下略」とい、或は「道綽禪師聖道浄土の二門を立てて聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文」が掲げられてゐる哉等より法然又聖道門を捨てると云う事に主眼をおいたであらうが此処に注意せねばならないのは「捨てざる」と云う事に於てである。

即ち聖道門を捨てた所の浄土門は実は浄土門でも何んでもないものであつて浄土門を破滅に導くものである。

使言す小は聖道門を否定する事によつて浄土門を否定するものは無に帰したものである。従つて聖道門が浄土門の中に入り浄土門の側からして聖道門を考へ直すに云う事に於て捨てざると云う意味を持たねばならぬのであつて聖道門と浄土門とを包みもの即ち浄土門の根底に聖道門が存すると云う事に於て聖道門を捨てた浄土門でなければ絶対的なものとする事は出来ないのであつて、この事は前述の正定助業の二業の立場

に於ても同様であつて吾々が正定業の念伴の宗教哲學的意義の考察に於てはかゝる論理構造を認識せねばならないのである。

斯くて法然が選取本願念伴業第二章段に於て善導の親聖疏に於ける正雜二行に關する根本命題を掲げて、「一心專念弥陀名号」の「念々不捨」をもつて「正定の業」とするかに彼の佛願に順するが故にとの基礎づけを論據とした事は、道綽の浄土門提唱に相應せしめるに善導の正定伴願論をもつてさしてゐると解するのである。

而して此の選取された本願の念伴は阿弥陀佛に絶対的に南無し無條件に帰命する事でなければならぬのであつて南無と対象となる弥陀佛はとこ迄も高次の實在者であり、超越的絶対的神聖性をもてるものでなければならぬのであつて、この絶対的實在者とは考へるべきものでも見るべきものでもなくして信ずるものであり内的體驗を通じて味はふべきものである。

称名念伴の南無阿弥陀佛の名号は言葉なき言葉であり表現を超えた所の表現である。換言して云うならば名号は實在の佛の家徴であり、絶対的實在の佛の名号を唱へる事によつて始めて實在の佛と語り合ふ事が出来るのである。即ち吾々は南無阿弥陀佛を口稱する事によつて絶対者に接觸し如來と我とが互に語り合ふ事が出来るのである。

而して語り合ふ世界こそ信仰の世界でなければならぬ  
いのであつて信仰の世界とは無限に時間的に自己自身  
を限定すると同時に無限に空間的に自己自身を限定す  
るのでなければならぬ。即ち無量壽無量光の中に生  
きる事が信仰の目的であらうのではないと考へるので  
ある。従つて無量壽にして無量光なるものは無にして  
有なるものであつて、形なき形の佛は称名念佛なる象  
徴を通じて語り得らるるのであつて、淨土教が大本佛  
教である限り有即無の媒介態に立脚するのは當然であ  
る。

故に淨土教に於ては凡夫が佛の中に或は佛が凡夫の  
中に没入するものではなくして凡夫が佛の中に入つて  
いかも佛の側より凡夫を見直す教でなくてはならない  
のであつて、凡夫は單なる凡夫ではなくして阿彌陀佛の  
無量壽無量光の私であるのである。而して總べての媒  
介を徹底的になす捨てて絶対の無に歸し更に絶対の有  
に転換して無條件に佛と凡夫とが語り合つているとす  
る媒介体は常に宗教的表現を用いる事を特徴とするの  
であつて、宗教性表現性をもつてゐるが故に称名を称  
え佛を拜む事によつて實在の佛と語り合う事が出来る  
のであると考へるのであつて此処に正定業の念佛の宗  
教学的意義を見出す事が出来ると思ふのである。

註、本論題は惠谷教授宗學概論を參考する。

## 但馬國分僧寺の一考

村尾 宸

但馬口分僧寺は聖武天皇初願の道場であつて、古蹟が  
城崎郡(但馬多郡)日高町口分寺にある本尊薬師如來は臥  
座の木像であつて丈は五尺一寸である。續日本紀の中  
には六尺三寸とあつて現存物とは異つて居り其小以後  
製作安置されに様に思はれる。顔並に手足に修理の跡  
が見られる。而しなほ全体に古調を存し脛の部分の衣  
紋の如きものは藤原時代の彫法を示してゐる。而し左  
記の記録が示す様に此の尊像は口分寺焚焼の  
頃京都に一時遷され居たが室暦年中に又此の地歸り  
一字を建立して安置したと云う事がある。

一 古佛薬師如來手前に所持致候処元來但馬口分寺御  
本尊二候故此度口分寺へ遷り被下候様ニ其元へ相頼  
石之薬師如來手前施主ノ志ニ而連上仕候処則臺座後  
光輝立被成再國分寺御本尊二御寄附満足ニ存候此佛  
二付外ヨリ遠近始申有之候爲後日一札仍而如件  
室暦九卯年八月九日

京都幸町松泉下ル処 大佛師竹内石門 印

到岸僧

一 石薬師如來之義元來凡三十年程以前再興之志願ニ  
付出石屋茂平右ト申方へ罷登り候処施主ノ京都ニ而